

## 高機能自閉症児・者の感情理解方略メカニズムの解明

米田英嗣 (京都大学 白眉センター 特定准教授)

### 1. 問題意識

自閉症スペクトラム障害とは、対人相互作用やコミュニケーションの発達に障害を持ち、常同行動や限局的・反復的な興味および行動のパターンを示す発達障害である (American Psychiatric Association, 2013)。自閉症者は他者に対する共感、感情理解や想像力に困難を持つとされるが (Baron-Cohen, 1989)、定型発達者とは異なった方略で他者の感情を理解している可能性がある (別府, 2009)。自閉症児・者は、善悪の理解が困難であると言われている (子安, 2000)。たとえば、会話の状況において相手の皮肉など言外の意味を理解することが困難であったり、相手がだまそうとする際に相手の悪意に気がつかないことがある (Frith, 2003)。これらのことは、自閉症児・者は他者の行動といった外的な情報は理解できるにも関わらず、意図といった内的な情報を利用することが難しいことを示している。

### 2. 本研究で得られた知見

**研究1「読解過程における善悪の判断」**では、自閉症スペクトラムの男児は、結末のポジティブ・ネガティブにかかわらず、登場人物の意図を手がかりにして、人物の善悪を判断していた。つまり、結末が良い場合、悪い場合ともに、善意を読解したら良い子、悪意を読解したら悪い子と判断していた。それに対し、定型発達の男児は、悪い結末のときのみ意図を手がかりにして判断をしていた。**研究2「善悪比較における特性と意図の効果」**の結果から、悪い結末の場合に、自閉症スペクトラム男児は、TD男児よりも意図を手がかりにするということがわかった。以上のことから、予測とは異なり、自閉症スペクトラムの男児は、読解過程において意図を正しく用いて善悪判断していることが示唆された。加えて、自閉症スペクトラム男児と定型発達の男児の善悪判断方略の違いが明らかになった。定型発達の男児は、結末に応じて意図を手がかりにするかどうかを柔軟に変化させるが、自閉症スペクトラム男児は、ポジティブな結末でもネガティブな結末でも、意図を手がかりとした方略で固定していた。自閉症スペクトラムの男児は分析的 (意図と特性の両方を手がかりに)、定型発達の男児は直感的に (意図を手がかりに) 善悪の判断を行っている可能性がある。善悪判断の方略の違いは、他者判断における自動的・分析的判断の相違を反映している可能性がある (Lieberman, 2007)。自動的 (直感的) 判断は腹内側前頭前野 (vmPFC) の活動、分析的 (熟慮的) 判断は背内側前頭前野 (dmPFC) の活動と関連しており、善悪判断時における方略の相違を支える神経基盤を検討することが必要であろう。**研究3「自閉症傾向読者による自閉的傾向登場人物の物語理解」**の結果、定型発達の児童は、定型発達の登場人物の物語が、自閉症スペクトラムの登場人物の物語よりも読みやすいということがわかった。それに対して、自閉症スペクトラムの児童が、自閉症スペクトラムの登場人物のほうが定型発達の登場人物よりも理解しやすいという結果は得られなかった。自分と類似した他者が書かれた物語を理解しやすく (Komeda et al., 2009)、共感をする可能性がある (Komeda, Tsunemi et al., 2013) という現象は、今回の研究では、定型発達の児童にも当てはまることが明らかになった。自閉症スペクトラムの成人を対象にした先行研究では、読解時間においては、自閉症スペクトラムの登場人物のほうが定型発達の登場人物よりも理解しやすいという結果は得られておらず、読解後の再認に影響を与えることがわかっている (Komeda, Kosaka et al., 2013)。今後は、読解後の記憶指標を、児童に対して適用することが必要である。

### 3. 本研究から得られた示唆

今回の結果から、小学校5年生以降の、定型発達の児童と同程度の知能を持つ自閉症スペクトラムの児童は、他者の意図を手がかりとして善悪の判断をすることができることがわかった。しかし、現実場面においては、他者の気持ちを推測することが苦手な自閉症スペクトラム児は多い。現実場面と今回の実験室実験の大きな違いは、他者の意図情報が、目に見える形で与えられているかどうかである。今回の研究で行ったように、他者の意図といった目に見えないものを明示し、視覚的な支援をすることで、他者との良好な関係を気づくことができるようになるかもしれない。TEACCHやABAといった支援方法は成果をあげているものの、具体的な実験データには恵まれていない。本研究によって、視覚情報を手がかりとして与えることの重要性を実証できたことから、視覚的構造化などの技法の精緻化につながることを期待される。